

北海道支部ニュース第33号

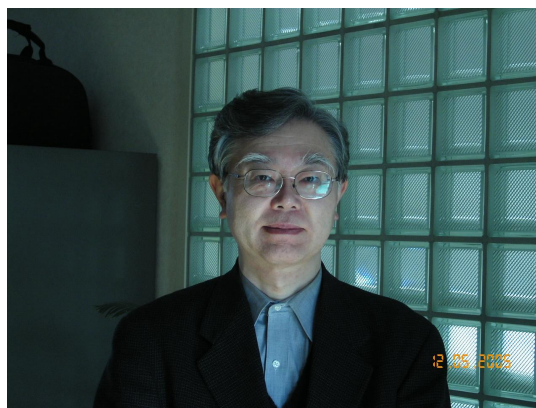
日本分析化学会 北海道支部 2006 年 7 月

支部設立50周年を祝す

日本分析化学会北海道支部長
田中俊逸

日本分析化学会北海道支部は今年設立50周年を迎える。1957年の7月27日に発会式が北海道大学理学部で開催されたということであるから、この支部ニュースが発行される頃が丁度50年に相当することになる。支部設立に尽力され、50年の長きに渡って支部を育ててこられた先輩諸氏に感謝しつつ、支部会員の方とともにこの50周年をお祝いしたい。

支部ではこれまでに設立25周年と35周年に祈念祝賀会や記念誌発行などの事業を行ってきた。しかし、50年というのは、人間の寿命や研究者の研究期間を考えると、先の25、35周年とはかなり異なった意味を持つであろう。例えば大学の4年生から分析化学を始めた人が定年退職まで大学で研究生活をしたとすると、42～45年間分析化学の研究や仕事を続けることができる。すなわち、25周年、35周年の時には発会式を知っている人がまだ現役として活躍されていたことになる。設立当初の状況やその雰囲気などの情報や資料も、現役で活躍中の先生方から比較的容易に集めることができたであろう。しかし、50周年となると、発会式を知っている方はもう現役にはおられない。もちろん支部参与の墓目先生や吉田・多賀先生は設立当初の頃のことをご存じだと



思うが、既に大分前に定年退官されていて、まとまった形での資料等は集めにくくなっている。今その当時を知る人から話を聞き、資料を提供して頂き、まとめておかなければ失われてしまう恐れもあり、その意味でも50周年は非常に重要な節目である。支部では、50周年を祈念して祝賀会を行うとともに、50周年記念誌を発行する計画で準備を行っている。また、支部の50年分の資料の電子化にも着手している。これは設立時の話や支部事業に関連した貴重な話、資料・写真をこの50周年記念誌に掲載し、長くその当時の思いや活動の様子を後世に残す重要な作業である。また、支部長が持ち回りで引き継いでいる支部の資料などもできるだけ電子化・携帯化し、誰でもどこでもこれらの資料を利用できるようにして、これを来たるべき100周年（その前に75

周年があるかもしれないが)に向けて整理しておこうと思う。会員の皆さんの中で貴重な資料や写真等をお持ちの方は、是非電子化のために一時的に支部に提供して頂ければ幸いである。

支部 50 周年の祝賀会は 10 月 28 日に開催されることになっている。多くの支部会員の皆様とともに 50 周年を祝したい。今年度は吉田仁志先生が日本分析化学会の名誉会員に推挙されたのに続き、北大

理学研究科の喜多村昇先生が学会賞、元北見工業大学学長の厚谷郁夫先生が学会功績賞をそれぞれ受賞されるなど慶事が続き、支部設立 50 周年に華を添えていただいた。また、長年にわたり支部に貢献された方を表彰することも計画中である。これらの授与式及び祝賀会を行いながら、気持ちも新たに次の 50 年へのスタートとしたい。

これまでの終了行事報告

冰雪セミナー：2006 年 1 月 7 日(土)及び 8 日(日)の両日に大澤雅俊幹事のお世話で、定山溪温泉溪流荘(札幌市職員共済組合定山溪保養所)にて 31 名が参加して開催された。池田元美先生(北大地球環境)による「地球環境の行く末と科学者の役割」、松枝大治先生(北大総合博物館)による「黄金の国ジパング - 火山と温泉が生み出す金鉱床 -」、市川勝先生(北大触媒セ)による「水素エネルギー社会にむけての触媒技術とその未来」、及び水谷文雄先生(産総研)による「単分子膜技術を活用したバイオセンサー」など多彩な話題提供があり、活発な議論が展開された。

冬季研究発表会：2006 年 1 月 31 日(火)及び 2 月 1 日(水)の両日に日本分析化学会、日本化学会、日本エネルギー学会の各北海道支部、触媒学会北海道地区との共催により、佐藤正知実行委員長のもと北海道大学学術交流会館で開催された。研究発表 103 件、特別講演 2 件、受賞講演件 7 件を行い、226 名の参加者があった。懇親会は北海道大学百年記念会館において、高分子学会北海道支部研究発表会、エネルギー資源環境発表会、三学協会研究発表会との合同で行われ、67 名が参加

した。

緑陰セミナー：2006 年 6 月 17 日(土)及び 18 日(日)の両日に古月文志幹事のお世話で、小樽自然の村(小樽市天狗山)で開催された。講演は、南尚嗣(北見工大)、藤原英樹(北大電子研)、武田晴治(北大創成)及び山田孝司(岐阜大工)の 4 名の講師により行われ、57 名(学生 43 名、一般 10 名、講師 4 名)が参加した。

夏季研究発表会：2006 年 7 月 22 日(土)及び 23 日(日)の両日に日本化学会北海道支部主催、高分子学会・日本エネルギー学会・石油学会・有機合成化学協会 各北海道支部、日本セラミックス協会東北・北海道支部、触媒学会北海道地区との共催により、奥山祐治実行委員長のもと室蘭工業大学で開催される。研究発表 121 件、特別講演 2 件、参加者 197 名、懇親会参加者 69 名の予定。

平成 1 8 年度支部役員

支部長	田中 俊逸	北大大学院地球環境科学研究所	事務局
副支部長	神 和夫	北海道立衛生研究所	北海道大学地球環境 科学研究所内
庶務幹事	斎藤 健	北大医学部保健学科	〒060-0810 札幌市 北区北 10 条西 5 丁目
会計幹事	長尾 誠也	北大大学院地球環境科学研究所	TEL / FAX :
	豊田 和弘	北大大学院地球環境科学研究所	011-706-2219
	古月 文志	北大大学院地球環境科学研究所	E-mail:
監査	西村 一彦	北海道立衛生研究所	jsac-hb@w9.dion.ne.jp
	板橋 豊	北大大学院水産科学研究所	
	喜多村 昇	北大大学院理学研究所	
参与	2 9 名		
幹事	5 9 名		

2006 CALENDAR

月 日	事 業	開催地	担当幹事
2006 年			
4 月 28 日	第一回幹事会	札幌	
6 月 17 日~18 日	第 22 回分析化学緑陰セミナー	小樽	古月 文志
7 月 22 日~23 日	2006 年夏季研究発表会	室蘭	奥山 祐治
7 月 25 日~ 8 月 25 日	2007 年度役員候補者選考委員選挙		
7 月下旬	支部ニュース第 33 号		田原るり子
9 月 1 日	2006 年度 日本分析化学会北海道支部公開 セミナー	苫小牧	藤井 清志
9 月下旬	2007 年度役員候補者選考委員会	札幌	
10 月 28 日	第二回幹事会	札幌	
10 月 28 日	支部創立 50 周年記念式典・祝賀会	札幌	三浦 敏明
11 月 11 日	北海道地区化学教育研究協議会	札幌	谷 博文
11 月中旬	学会賞等受賞候補者推薦委員会 北海道分析化学各賞受賞者選考委員会	札幌	
12 月下旬	支部ニュース第 34 号		田原るり子
2007 年			
1 月上旬	第 42 回冰雪セミナー	定山溪	嶋津 克明
2 月初旬	2007 年冬季研究発表会 (2006 年度北海道分析化学各賞授賞式)	札幌	伊藤八十男
2 月下旬	審議会 (第三回幹事会)	札幌	

平成 18 年度事業案内

2006 年日本分析化学会北海道支部公開セミナー

主催：日本分析化学会北海道支部

共催：苫小牧工業高等専門学校

日時：平成 18 年 9 月 1 日（金） 14 時 17 時

会場：苫小牧工業高等専門学校

苫小牧市錦岡 443，電話：0144 67 0814

プログラム

1. 人類最古の氷を求めて 南極の氷が語ること

講師 古崎 睦 先生（旭川工業高等専門学校物質化学工学科）

2. DNA マイクロアレイ技術を応用した薬剤耐性結核菌の迅速遺伝子診断

講師 鈴木定彦 先生（北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター）

参加費：無料

交流会：講演終了後に講師を囲んで簡単な交流会（会費 2,000 円程度）を予定していますので、併せてご参加下さい（事前の申込が必要です）。

申込締切：8 月 25 日（金）

申込方法：氏名、勤務先・所属、連絡先（所在地、郵便・電話・Fax 番号、E-mail）および交流会参加の有無を明記のうえ、郵便、Fax または E-mail にて下記宛にお申し込み下さい。

申込先：〒059-1275 苫小牧市錦岡 443 苫小牧工業高等専門学校

物質工学科 藤井清志

電話，Fax：0144 67 8038，E-mail：kfujii@sem.tomakomai-ct.ac.jp

2006 年度北海道地区化学教育研究協議会

日時：平成 18 年 11 月 11 日（土） 10:00～16:40

懇親会 17:30～19:30

会場：北海道大学大学院地球環境科学研究院 C - 104 講義室

札幌市北区北 10 条西 5 丁目

主催：日本化学会北海道支部、日本分析化学会北海道支部、日本化学会化学教育協議会

後援：北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道高等学校長協会、

北海道小学校理科学研究会、北海道中学校理科教育研究会、

北海道高等学校理科学研究会

参加費：500 円

内容：

討論主題 理科（化学）教育における小・中・高・高専・大学での取り組み

特別講演 「中学校における「化学」 - 小中高の一貫したカリキュラムをめざして - 」

世田谷区立梅丘中学教諭 江崎 士郎

情報提供、話題提供、提言、自由討論

小・中・高・大学での研究実践と課題に関する提言を4～5件ほど予定

対象：小学校から大学までの教員

参加費：500円（含む要旨集） 懇親会費 5,000円（予定）

参加申込方法：ハガキ（FAX, E-mail も可）に 1.氏名、2.所属、3.連絡先住所、4.電話番号、5.懇親会出席の有無を明記の上、下記宛お申し込みください。

申込先：〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条7丁目3番5号

北海道立理科教育センター化学研究室内，化学教育研究協議会係 近藤浩文

電話:011-631-4405，FAX:011-631-9475，E-mail:h-kondo@hokkaido-c.ed.jp

***** 特別寄稿 *****

松花江の化学物質汚染に関する現地調査のことなど

北海道立衛生研究所 神 和夫

「神さん、松花江の汚染調査に関心ありますか」（田中俊逸教授）「オオッ、あるよ行きたいね」という会話が交わされたのは本年1月7日に開催された冰雪セミナーの懇親会2次会の席である。田中先生の門下生で昨年北大で学位を取得し、現在中国東北林業大学（ハルビン市）の助教授をしている林永波先生から昨年11月に中国吉林省で発生した化学工場の爆発事故に伴う松花江の汚染に関して、汚染調査と環境修復について研究協力の申込みがあったのだという。北海道と黒竜江省は姉妹州の関係にあることなどから、私としても中国東北地方には関心があったが、これまで訪問の機会はなかった。松花江の汚染調査と環境修復に関する日中共同研究を立ち上げるための打ち合わせを北大院環境科学院の田中俊逸教授及び古月文志教授とともにに行い、3月に両先生とともにハルビンの林先生を訪問し現地調査を行う機会を得た（写真1）。この調査結果の一部は日本分析化学会第55回年会（大阪）で公表する予定であるが、ここでは林先生から入手した情報等を基に汚染事故の概要を紹介するとともに、



写真1

現地調査のエピソードや今後の課題に触れてみたい。

中国石油吉林石油化学会社の爆発事故

2005年11月13日、中国吉林省吉林市にある中国石油化学公司第101工場内で爆発事故が発生した。周囲100～200メートル以内に建つマンションやアパートの窓ガラスは爆発の衝撃で割れ、松花江の北側に位置する工場の化学工業区一帯が、爆発による黒い煙に包まれた（写真2）。この爆発で工場の従業員6人が死亡、60人が負傷、化学工業区周辺の住民約1万人が緊急避難した。事故のきっかけはE102と呼ばれる装置及びパイプラインが温度上昇して爆発し（社員の不注意）い



写真 2

くつかのステップを経てニトロベンゼン貯蔵缶 3 台とベンゼン貯蔵缶 2 台が燃焼・爆発した。11 月 14 日 10 時、これらの貯蔵物質が吉林化学会社の東 10 号線の松花江に流入したことが確認され（苦いアーモンドの味がしたという）、ベンゼンなどの汚染物質約 100 トンが松花江に流入したと推定された。中国石油吉林石油化学会社はウレタンの原料であるアニリンの製造における中国最大手で、国内シェアは 27%、年産能力は 13 万 6000 トン、爆発事故を起こした工場の従業員は 1300 人で事故時はフル稼働状態、設備は事故により全壊した。

事故の概要と直後の影響

この事故による松花江への汚染物質の流入は、松花江河川水を水道水源とする人口約 400 万人のハルビン市民が 5 日間に亘って水道水を利用できなくなるなどの甚大な影響をもたらした。さらに、下流域のジャムス市における河川水取水制限、ロシア・ハバロフスク市でも松花江河川水の流入を防止するための緊急堤防建設など国際問題に発展した。また、汚染物質がアムール川を下ってオホーツク海に流入することによるオホーツク海・日本海の汚染と水産資源への影響が懸念された。そのためメディアの注目度も高く、しばしば大きく取り上げられた。中国国

内でも事故の初期は別として、松花江の汚染の進行状況はある程度報道されたようで、その様子はインターネットを通じて「日本語で読む中国環境問題」などのメールマガジンでもある程度入手できた。また、事故後 2 週間程度の汚染の概要は中国環境総局（China State Environmental Protection Administration；SEPA）が提供したデータに基づいて国連環境計画（UNEP）が作成した“The Songhua River Spill China - Field Mission Report, December 2005”にまとめられている。この中で、河川水における汚染物質濃度の低減化対策としては流下による希釈効果、ダムでの放流水を増やすことによる希釈、取水口への活性炭の投入などが行われたこと、汚染帯を監視し、基準値以下になってから取水を再開したことなどが報告されている。林先生によると、ハルビンでは他の地域から飲料水が確保されたこと、学校では休校措置や疎開政策がなされたとのことである。なお、中国におけるベンゼン、ニトロベンゼン、アニリンの国家水質標準（基準）はそれぞれ 0.01、0.017、0.1mg/L で、ハルビン市通過時のニトロベンゼン濃度の最高値は 0.58mg/L であった。

事故直後の経過

- 11/22 ハルビン市、取水口閉鎖。飲料水を求めて市民が商店に殺到
- 11/25 ハルビン市の貯水池に活性炭 157 トン投入
- 11/27 ハルビン市で制限付き給水再開
- 11/28 ハルビン市で基準クリア、給水再開
- 12/06 チャムス市、松花江の水利用を全面禁止

アムール川への流入

- 11/24 中国がロシア側に情報提供へ；アムール川生態系への深刻な影響を懸念

- 12/01 (日本)水産庁「情報収集」、海上保安庁:「事態を注意深く見守っている」
- 12/02 中国、ロシアに水質検査装置 6 台と活性炭 150 トンを提供
- 12/16 汚染物質、ロシア到達、非常事態宣言は見合わせ
- 12/21 ハバロフスク、一部で断水開始
- 12/22 ハバロフスクに到達
- 12/27 活性炭 400 トン、中国からハバロフスクに到着 ; 「人民網日本語版」

中長期対応へ

2006 年 1 月 25 日、黒竜江省当局から水や魚の摂取について“安全宣言”が出されたことで、中国国内では事故直後の緊急対応から中長期対応に移行することとなった。松花江が水質汚染対策プロジェクトの重点対象となり、中国政府が水質改善に 3800 億円を投入することを決定したことや、アジア開発銀行が松花江の環境改善に 20 億ドルを投入することを決定したことなどが報道されている。中国では化学工場の過半数が河川に隣接して建設され、河川の汚染が深刻になっているが、「松花江」繰り返さぬため、環境破壊企業社名を公表するなど事故防止に積極的に取り組むようになっていく。さて、この松花江汚染・アムール川汚染に関する報道は黒竜江省の安全宣言後、急激に減少したが、仮に松花江における汚染物質の本体が流下してしまったとしても、事故前の状態に回復したのかどうか明らかではなく、ハバロフスクに汚染物質が到達したとされた以降のアムール川の汚染状況やオホーツク海への流入に関しては情報が乏しく、これらを解明するための調査研究が必要である。

現地訪問、分厚い氷の下からの採水

松花江は渇水期と“満水期”とでは水量が約 10 倍違うのだという。我々が訪れた 3 月中旬は氷が張り始めた時期に比べ

て水位は 2 メートル近く低下していた。これは川岸に傾斜して張り付いている氷の様子から推察出来た。採水地点は時間の制約からハルビン市街のわずかに上流及び下流の地点に絞らざるを得なかった。林先生の教室の大学院生及び学生 7~8 名で大学のマイクロバスで出かけることとしたが、誰も松花江に張った氷に穴を開けた経験はなく、それ用という特殊な道具を使っても歯が立たない。北海道のワカサギ釣りで目にするような厚さではないのだ。皆で氷上を歩き回って地元の漁師さんが漁網を入れるために開けた穴をみつけたが、採水器を降ろそうとしてトラブルになりかけた。林先生と古月先生が懸命に交渉を続け、ようやく我々のために採水用の新しい穴をあけていただくことになった。掘削用具は T 字型をした木製の棒の先に底辺 5~6cm、高さ約 20cm ほどの鋭利な四角錐の金属を取り付けたものである。この T 字の部分を両手で持って勢いよく足元の氷に突き立て、砕いた氷をスコップで排除しつつ一片 50~60cm の四角の穴を掘り進んで行くのである。深さ約 50cm を掘り過ぎてからはやや慎重に掘り進められた。予想された深さで強く突き立てると底から河川水があっという間に湧き出し、結氷した川の表面とほぼ同じ水位になった。予想していたより濁っていない。氷の厚さは約 1 m と推定された。所用時間約 15 分、さすが地元の漁師さんと感心した次第である。こうしてようやく採水器を降ろし、採水することが可能になった(写真 3, 4)。

分析試料の輸送

北京の JICA 事務所にしばしば出張する日本人研究者によると、中国国内の環境試料を分析のために日本に持ち帰るのは一般的にはほとんど困難だという。ましてや汚染事故の発生した河川水試料など最後には空港で没収されるであろう、



写真 3



写真 4

無理に頑張ると逮捕されるよとまで助言された。現地調査によりその時点での汚染状況をできる限り正確に把握することが汚染対策役立てる上で不可欠であり、そのためには河川水試料等を持ち帰り実際に分析することが大前提になるはずである。そのことによって公表されたデータとの整合性も検証可能になる。空港で予想される事態への対処のために我々がそれなりに白熱した議論をして出した結論は至って単純で“東北林業大学が共同研究の材料として証明書を発行してくれたので日本へ持ち出せると考えたが、ダメというならあきらめよう、ただしベストを尽くそう”というものであった。ハルビンから瀋陽に向かう国内便では一部試料の開封を求められたが、瀋陽から千歳に向かう便では咎められることはなかった。こうして、道立衛生研究所におけるニトロベンゼン、VOC、重金属の分析

が可能となったが、瀋陽空港での田中先生と古月先生の安堵した様子が忘れられない。

北海道沿岸での汚染状況の把握は緊急課題 - 会員の連携で

2006 年 7 月現在、汚染物質はすでにオホーツク海に流入して希釈されてしまったとも考えられるが、汚染物質の種類によっては松花江・アムール川での残留や生態系に及ぼす影響が懸念される。オホーツク海での拡散の様子も不明である。北海道は本年 2 月、各省庁に情報収集を求める要望書を提出したが、未だ回答はないとのことである。国際的に有名になった松花江の汚染事故の影響がどの程度のものなのか、北海道沿岸における海水や魚介類における確かなデータを示しておくことは重要であり、モニタリング調査を行うことは緊急課題であると考えている。また、こうした調査研究は一グループで出来るものではなく、支部会員の連携による調査を切望している。

おわりに

今年の 2～5 月、オホーツク海に面した海岸に 5 千羽を超える海鳥の死骸が油まみれの状態で打ち寄せられていることが判明し社会的問題となったが、この重油汚染事故（北海道環境科学研究センターにより C 重油であることが明らかにされた）は改めてオホーツク海と北海道の生態系が不可分のものであることを示したものである。松花江の汚染防止と環境修復に関する研究の発展はやがてアムール川を通したオホーツク海の汚染の低減にも繋がることであろう。2006 年 3 月の現地訪問で北大大学院環境科学院と東北林業大学との共同研究（及び我々の日中共同研究）がスタートしたがこれがその一歩となることを期待している。また、本稿では触れなかったがカーボンナノチューブ (CNT) 含有ポリウレタン、アルギン

酸ゲルビーズ(活性炭、CNT、DNA)、シクロデキストリンポリマー、電気化学的捕捉・計測、バイオ・ファイトレメディエーションなどが今後環境修復手法として検討されることを期待している。団長の田中先生、現地の事情に明るく講演の通訳など一切の通訳をしていただいた古月先生、現地の林先生の心からのおもてな

しにより得難い経験ができたことを記して感謝したい。また、ハルビン市(400万人)・瀋陽市(720万人)の訪問で私の中国東北部のイメージが大きく変わったことも付記したい。

(写真1、2は林先生提供)

***** 北海道分析化学奨励賞研究紹介 *****

微生物を用いるオンチップバイオアッセイの開発と

変異原性試験への応用

北海道大学 前花 浩志

この度は、栄誉ある「2005年度北海道分析化学奨励賞」を頂き、大変光栄に存じます。以下に、微生物を用いるオンチップバイオアッセイの開発と変異原性試験への応用に関する研究を簡単に紹介させていただきます。

半導体微細加工技術を利用して微小な反応器等を加工したマイクロチップを用いる化学分析は、分析プロセスや分子プローブの集積化により操作の簡便化や分析時間の短縮化などを可能にすることから生化学分野への応用を中心に盛んに研究が行われています。一方、生物学的な分析法である細胞を用いるバイオアッセイは、生体に対する化学物質の毒性などの影響を直接的に評価できることから、環境分析や医薬品のスクリーニングなどに広く利用されていますが、煩雑な操作や長い分析時間を必要とする問題があります。そこで本研究では、これらを軽減しうるオンチップバイオアッセイフォーマットを開発し、微生物を用いる変異原性試験への応用を試みました。

細胞を固定化する貫通孔(ウェル)をアレイ状に配置したチップと試料を導入するチャンネルを平行に配置したチップを組み合わせ、そこに形成される3次元微小流体ネットワークを利用することで、多検体・多項目の一斉分析が可能な新規オンチップバイオアッセイフォーマットを考案しました。このフォーマットでは、2枚のポリジメチルシロキサン製マイクロチャンネルチップとそれに挟まれた1枚のシリコン製貫通ウェルチップを使用します。アガロースに懸濁したアッセイ用試験菌株を一方のチャンネルチップから導入し、ウェル内でゲル化する。次いで、別のチャンネルチップから測定物質を導入して試験菌株と反応させることで、アガロースゲルに固定化した複数のアッセイ用試験菌株と複数の被験物質を掛け合わせた全ての組合せのアッセイを一組のチップ上で行うことが可能となります。25(5×5)個の貫通ウェルを有する試験菌株固定化用チップならびに5本のチャンネルを有する試験菌株および試料導入用チッ

プをそれぞれ作製し、発現誘導物質によりルシフェラーゼを発現する複数の大腸

大腸菌をモデル菌株として用い、考案したフォーマットの評価を行いました。その結果、モデル大腸菌の種類および発現誘導物質の濃度の組合せに応じた強度の異なる 25 通りの生物発光を一組のチップ上で一斉に検出することができ、本フォーマットによるオンチップバイオアッセイが可能であることを明らかにしました¹⁾。

さらに、本オンチップフォーマットを SOS 応答に基づくルシフェラーゼの遺伝子発現を指標とした変異原性試験に応用しました。変異原物質としてマイトマイシン C を用い、培養液を用いる従来法と比較しました。その結果、本フォーマットにおいても変異原性の強さを示す用量反応曲線が従来法と同様に得られ、検出下限はいずれの方法においても 0.2 ng ml⁻¹ となりました。その他代表的な変異原

物質数種類についても同様の結果を得ることができました^{2,3)}。

今後、代謝活性化機能の集積化や保存安定性の向上により、本法がより実用的なアッセイ手法として医薬品開発や環境分析などに大きく貢献するものと思っております。

最後に、受賞にあたり推薦して頂いた上館先生ならびに選考に携わって頂いた各先生に深く感謝申し上げます。

- 1) H. Tani, K. Maehana and T. Kamidate, *Anal. Chem.*, **76**, 6693 (2004).
- 2) K. Maehana, H. Tani, T. Shiba and T. Kamidate, *Anal. Chim. Acta*, **522**, 189 (2004).
- 3) K. Maehana, H Tani and T. Kamidate, *Anal. Chim. Acta*, **560**, 24 (2006).

(現所属；旭化成(株) 新事業本部 研究開発センター)

2005 年度北海道支部会計報告の概要

支出		収入	
会議費	436,231	支部費	1,183,200
講演会費	10,000	学会賞推薦委員会	10,000
セミナー費	420,000	印税収益	994,721
緑陰セミナー費	(200,000)	討論会収入	152,330
氷雪セミナー	(160,000)	受取利息	16
公開セミナー	(60,000)	雑収入	67,459
研究発表会費	320,000		
夏季研究発表会	(50,000)		
冬季研究発表会	(190,000)		
化学教育研究協議会	(80,000)		
学会賞推薦委員会費	15,185		
印税配分	373,500		
書籍編集費	0		
O A 関係費	50,000		
通信費	61,672		
消耗品費	13,854		

印刷費	70,000		
支部ニュース編集費	46,218		
人件費	400,000		
旅費交通費	53,480		
北海道分析化学賞等経費	141,979		
雑費	200		
特定預金支出	0		
当期剰余金	-4,593		
合計	2,407,726	収入合計	2,407,726

支部会員の欄

この欄では、分析化学会会員の北海道支部への転入・新入会、北海道支部からの転出など会員に関する情報をお伝えします。新たに以下の方々の入会が認められました(「ぶんせき」2006年1月号～6月号掲載分)。支部会員の異動に関する情報をお持ちの方は、支部ニュース編集委員までお知らせください。

永峰 樹(株アレフ) 大西 健(北見工大工) 金 正植、佐々木 隆浩(北大院環境)
橋本 諭(道立衛生研) 山科 智裕(北大院水産) 渡部 敏裕(北大院農)
白 俊玲(北見工大院工) 坂本 幸宏(株北海道分析センター) (敬称略、順不動)

編集後記

北海道支部ニュース33号をお届けします。巻頭言は恒例によりまして平成18年度支部長の田中俊逸先生(北大院環境)にご執筆いただきました。また、特別寄稿として昨年中国吉林省における化学工場爆発による環境汚染の現地調査に赴かれました神和夫先生(北海道立衛生研)に現場でのさまざまなご体験をもとにご執筆いただきました。昨年より新たに企画されました北海道分析化学奨励賞研究紹介には前花浩志先生(北海道大学(受賞時)、現在は旭化成(株)新事業本部研究開発センター)に受賞研究をわかりやすくご披露いただきました。ご執筆いただきました先生方には、編集委員が不慣れなため、ご多忙中の短い時間のなかで、執筆を快くお引き受けいただきこの場をお借りして深く感謝いたします。

平成18年度の支部ニュース編集委員は、石坂昌司氏(北大院理)、西村一彦氏(道立衛生研)、照井教文氏(一関高専)に代わり、千葉真弘氏(道立衛生研)、工藤勲氏(北大院水産)、福嶋正巳氏(北大院工)が加わりました。支部ニュースに関するご意見・ご要望がございましたらご連絡下さい(連絡先: 田原るり子 (E-mail: tahara@hokkaido-ies.go.jp)、千葉真弘 (E-mail: mcba@iph.pref.hokkaido.jp))。また、北海道支部のホームページ(<http://nakamura-2.ees.hokudai.ac.jp/jsacbranch/>)には最新情報、支部ニュースのバックナンバーが掲載されていますので、ご活用ください。

(編集委員: 田原るり子、千葉真弘、工藤勲、福嶋正巳)

日本分析化学会北海道支部創立 50 周年

記念式典並びに祝賀会のご案内

盛夏の候、会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、1967 年 7 月 27 日に設立された日本分析化学会北海道支部は本年をもって創立 50 周年を迎えました。

わずか 10 名の会員でスタートした本支部ですが、創立以来、「研究発表会」、「公開セミナー」、「冰雪セミナー」、「出版事業」など、着実に支部活動の範囲を拡げ、北海道地域における分析化学振興の拠点として大きな役割を果たしてきました。また、本部事業である「分析化学会年会」や「分析化学討論会」の数度にわたる共催を通じて日本分析化学会の発展にも貢献してきました。これらの支部活動はその後発展的に継承されており、日本分析化学会においては、「会員数は最少ながら、学会活動の最も活発な支部」との評価を受けるに至っております。これも一重に支部創設に参加された諸先生をはじめ会員の皆様のご尽力の賜物と、改めて感謝申し上げます。

北海道支部では創立 50 周年を記念して、本年 10 月 28 日（土）に下記の要領で記念式典並びに祝賀会の開催いたします。近日中に改めてご案内申し上げますが、是非ともご予定に入れて下さるようお願い申し上げます。

敬具

2006 年 7 月

日本分析化学会北海道支部

支部長 田中 俊逸

北海道支部創立 50 周年記念事業委員会

委員長 三浦 敏明

記

日本分析化学会北海道支部創立 50 周年記念式典並びに祝賀会

日 時： 2006 年 10 月 28 日（土）18 時より

場 所： KKR ホテル札幌

札幌市北区北 4 条西 5 丁目、Tel. (001) 231-6711

なお、当日は 16 時より北海道支部第 2 回幹事会が予定されています。